
第 21 章 沙漠の洪水(後編):1965 年(28 歳)

外部へ急を知らせる

6 日目か 7 日目頃になると、大地はまだ湿り気を帯びていたが、もう沼のような状態からは脱していた。道路もやっと通行可能となった。当地の事態危急の知らせは、東のインサラーからも西のレガンヌからも同時にアルジェへ発せられた。政府はようやく、千キロも彼方の沙漠の真ん中を洪水が襲ったことを知ったのだ。8 日目の 1 月 15 日、我々はラジオで、アルジェの政府がアウレフを中心としたティディケルト地方に自然災害による非常事態宣言を発令したと聞いた。政府がやっと当地の事態を把握したのである。アウレフは災害指定地域となった。ラジオは、政府は閣僚の一人を、被害状況の確認のため現地に派遣するとも言っていた。

この頃、当地の住民は皆ムスリムであるはずなのに、飢えのためか、コソ泥が横行するようになった。兵隊が町を巡回し、怪しい連中を見かけると銃を空に向けて撃って威嚇した。家に立ち入ることを禁止していた当局の命令も、盗難の危険を配慮して解除された。若者たちが中心となって自警団を組織し、交代で町のパトロールを始めた。役所の倉庫には、普段から生活保護の必要な世帯に配るために、いくらかの食糧のストックがあったので、これを使い、この頃から各地区で本格的に被災民のための炊き出しが始まった。炊き出しでは、大麦のスープや、オートミールなどが供されたが、人々は押し合ったりせず、おとなしく列に並んだ。同じ災難に見舞われた者同士、自然に連帯感が生まれていたのである。ようやく住民の間に落ち着いた空気が戻ってきつつあった。

空にはその後も時折厚い雲が現れては、また消えて行った。誰もが、また雨が降りほしないかと不安がった。何故また雨が降るのを恐れるのか。家々はもう粘土の固まりになってしまっていて、壊れるものなんか何も残っていないじゃないか。豪雨が去った後、気温は非常に低く、特に夜になるとひどく冷え込み、日の出が待ち遠しかった。明け方の朝 6 時頃には 0～2 度までに下がったのではないかと思う。慣れない寒さに、強風が追い打ちをかけた。しかし、この風はいつもと違って砂埃を起こさなかった。私は、こんな天気が続いたら、老人や赤ん坊は病気になって死んでしまうのではないかと心配になった。

大臣の現地視察

1 月 20 日、豪雨から 13 日目、医療保健大臣のモハメッド・セギール・ナカシュ(Mohamed Séghir Nakkache) 博士と、アカセム(Akacem) 国会議員を乗せた飛行機が、危険を押しアウレフの飛行場に降り立った。空港も荒れ果てており、管制塔はもとより、必要な付帯設備にも損壊の被害が出ていた。幸

い滑走路だけは既に乾いていた。大臣一行をアウレフの住民は熱狂的に出迎えた。だれか偉い人の訪問で、こんなに沢山の人が集まったのを見たのは初めてだった。ナカシュ大臣は、STS 社の発電所の傍らに住民を集め、次のように演説した。群衆の最前列には、小学校の児童たちが陣取っていた。

「今日私たちは、危険を押し当てることに降りました。この一事をもつても、アルジェの革命政府が、どれだけあなた方の境遇を重要視しているか、分かってもらえると思います。国家は、あなたたちと共にあります。ベンベラ大統領も、自分の皆さんに対する連帯の気持ちを伝えるようにと、私に言いつけました。私も、私に同行して来た同志たちも、ここに来たのは単なる表面的な視察のためではありません。皆さんと、今回の不幸を分かち合うために来たのです。皆さんも私たちも同じアルジェリア国民であり、私たちが国民として国から享受していることは、同じように皆さんにも受け取る権利があります。今回大変な災難が皆さんに降りかかりましたが、皆さんの顔には、神を信じる者だけが持つ強さが見て取れます。その強さがあれば、必ずやこの困難を克服出来るでしょう。もう少しだけ辛抱してください。政府は、皆さんと共に働きます。」

その後、大臣は病院を訪れ、医師や看護婦と話し合い、一つ命令を下した。それは、住民全員にワクチンを接種するというものだった。これを実行に移すために、後になってインサラーの病院から医師や看護師が応援にやって来た。大臣と、彼に同行して来た政府の役人や記者たち、総勢 10 名ほどは、被害の程度を確認するため、何時間もかけて被災した家々を一軒一軒歩いて見て回った。ナカシュ大臣は終始住民に謙虚な態度で接していたが、そこからは彼の人がわかった。大臣たちは、この日の夕方アルジェへ帰って行った。



洪水の被害状況 (著者提供)

町を建て直す

学校や病院、それに郡役所の倉庫などは、洪水から一か月以上の間、避難民の仮の住まいとなった。しかし、それらの建物の中では、女も子供も、柘榴の実のようなぎゅうぎゅう詰めの状態だった。それに、大多数の被災民は、そうした仮の避難所にさえ入れなかったのである。そうした人々の間には悲壮感が漂っていた。一方で、住民の中には早々に、ナツメヤシの葉・幹・枝・繊維等を使って、仮の小屋を建て始める如才ない者もいた。ナカシュ医療保健大臣がアルジェに帰った後、我々はラジオで、政府が、食糧やテントを積んだ軍のトラック 45 台をアウレフに派遣するという嬉しいニュースを聞いた。三日後トラックの隊列が到着した。物資の一部は、やはり洪水の被害を蒙ったインサラーの当局に横取りされてしまったが、無事アウレフに着いた分だけでも、住民たちを安堵させるのに十分だった。援助物資の配給は直ぐに開始された。郡役所に任命された責任者たちを、FLN 地方支部の青年たちが手伝い、更には地元の名士達まで加わって、物資を配ったり、また、テントの組み立てを手伝ったりの作業に当たった。運ばれてきた物資のうち、医薬品は全て病院に収納されたが、残りは各家庭に、構成人数に応じた量が配分された。近隣の町々の人々も我々に援助の手を差し伸べてくれた。アドラールやレガンヌ、インサラー、遠

くはタマンラセットの善意の人々が、かなりの量の食糧を送って来てくれたのだ。アウレフの外の親戚から食糧などを受け取っている家もあったが、彼らは、なんと正直にも、その事実を隠さず、自分たちの所はもう食糧は十分だと申し出た。

大洪水でアウレフの町は瓦礫の山と化した。住民たちは再建への勇気を失わなかった。一日も早く元の生活を取り戻そうと、誰もが死に物狂いで働いた。実際、平時なら怠けてばかりいる者でさえ、自分から出来る仕事をこなしていた。遊牧民は、テントがあれば、後はどうにか出来たが、町の住民はそうはいかないのだ。それぞれが、自分の力だけを頼りに家の再建に打ち込んだ。あるいは、グループを作り、順番に各家を回って工事に当たるなど工夫する者たちもいた。後になって、政府からアウレフの住宅再建に援助を支給すると発表があったが、住民の自力再建に向けた意欲を削ぐことはなかった。しかし、どんなにがんばっても全てを元通りにすることは無理である。復興は成されたものの、アウレフの町の顔は大きく変わってしまった。

まず家を建て直すことが急務だったが、ナツメヤシ農園の方もいつまでもほっておく訳にはいかない。未曾有の大雨は、家屋だけでなく、何百年来オアシスに水を供給し続け、人々の生活と生産を支えて来たフォガラをも破壊した。暗渠のあちこちで落盤が発生し、そのため水の流れが滞って流量が減ってしまっていた。また、一部には、水の流れが完全に止まってしまっているフォガラもあった。フォガラの修理は、なんとしても急がなければならない。フォガラなしには、地域の生産活動は一日も立いかないのだから。デートを突らせる 18 万本余りのナツメヤシをはじめ、穀物、菜っ葉類、家畜の飼葉など、なにもかもフォガラの水を頼りにしていた。



イメージ画像：アウレフの町中にあるフォガラの堅井戸。井戸の淵の人物左側がアジ氏、右側が小堀教授（2002 年記者撮影）

死者もびっくり

水浸しになったのは、町の家々だけではない。何日も続いた降雨のせいで、墓地でも地面の深い所まですっかり水が染みこみ、墓の中まで水が入ってしまった。当地の墓は、石の板を、粘土と砂を混ぜたモルタルでつないただけのものなので、気密性は決してよくない。墓地の周囲には耐え難い悪臭が立ち込めた。棺の中まで水が入り込んだために、中の遺体が腐敗してしまったのだ。病院の医師は郡役所に、衛生上何か早急に対策を取るよう進言した。役所は、消毒を行うことに決め、青年たちを募っていくつかの作業班を組織した。雨で穴が開いた墓は全て、その穴を砂で埋め、上から更にモルタルで封印をした。また、蛆がたかっているところには、ポンプ付の噴霧器で薬を撒いて消毒した。放置されたままになっていた動物の死骸についても、新しいものも古いものも、全てガソリンをかけて焼き、その後穴を掘って埋めた。(訳注:かつてオアシスの町はずれには、墓地の他に、動物の死体やゴミを投げ捨てる場所があった。乾燥度が強いため、それらは腐らず干乾びてペラペラになり、いつか風に千切れて砂に埋まってしまうので、衛生上は何の問題もない。)

ところで、この時の豪雨は、町の住人たちには地獄の責苦であったが、伝え聞いたところによると、遊牧民たちの目には天の恩恵と映ったらしい。この差異は、洪水から一か月後誰の目に明らかとなった。遊牧民たちが家畜を追って生活しているところには、一面に緑の牧草が芽吹いていた。

この時のティディケルト地方の洪水で、完全に家と食糧を失った被災者の数は 1 万 4 千人に上った。被害の地域的広がりには、6 市町村に及んだ。内訳は次の通りである。アカブリ (被災者数 6 千人)、アウレフ中央 (6 千人)、アウレフ・シュルファ (Aoulef Cheurfa) (5 千人)、チット (850 人)、ティモクテン (700 人)、インベルベル (250 人)。